

『おくのほそ道』考

萩原 恭 男

A Study of "Okunohosomichi"

Yasuo HAGIWARA

芭蕉は、旅の楽しみを『笈の小文』において、

山野海浜の美景に造化の功を見、あるは無依の道者の跡をしたひ、風情の人の実をうかがふ。(中略)時々気を転じ、日々に情をあたらむ。もしわづかに風雅ある人に出合たる、悦かぎりなし。と述べている。つまり、

- 一、 神の造り出した美しい景色を見ること。
 - 二、 一切の執着を捨てた仏道修行者の旧跡を尋ねること。
 - 三、 歌人の感動を追体験すること。
 - 四、 片田舎で俳諧に志ある人に出会うこと。
- の四つの楽しみである。

芭蕉紀行文の代表作『おくのほそ道』にあてはめれば、

- 一 「松島」「象潟」
- 二 「雲巖寺」「須賀川」「松島」
- 三 「白河」「遊行柳」「武隈」
- 四 「最上川」(大石田)

の各章があげられる。(章の区切り、小見出しは岩波文庫『おくのほそ道』萩原恭男校注によった。)しかし、『おくのほそ道』は、これらの旅の

楽しみだけを描いたのではない。芭蕉が目指したのは、新しい紀行文の創造であつた。『笈の小文』に、

抑、道の日記といふものは、紀氏・長明・阿仏の尼の、文をふるひ情を尽してより、余は皆倂似かよひて、其糟粕を改る事あたはず。まして浅智短才の筆に及べくもあらず。其日は雨降、昼より晴て、そこに松有、かしこに何と云川流れたりなどいふ事、たれくもいふべく覚侍れども、黄哥^(金)蘇新のたぐひにあらざば云事なかれ。されども其所く風の風景心に残り、山館野亭のくるしき愁も、且ははなしの種となり、風雲の便りともおもひなして、わすれね所く跡や先やと書集侍るぞ、猶酔ル者の慄語にひとしく、いねる人の謔言するたぐひに見なして、人又亡聴せよ。

とあつて、芭蕉の紀行文観が示されている。

これを要約すれば、

○『土佐日記』『東関紀行』『十六夜日記』が、旅の風情を書き尽くしてから、それ以後の紀行文はその糟をなめているだけである。

○旅の日々、実際に体験した事実をそのまま書くことは、誰にでもできそうに思えるが、それでは面白味がない（単なる記録にすぎないからである）。

○中国宗代の詩人黄山谷や蘇東坡のような題材の新鮮さ表現の奇抜さがなければ、新しい紀行文の意味がない。

○浅智短才の私（芭蕉）が、旅での特に印象深く感じられたことを書き集めたのは、話の種となると同時に自然に親しむきっかけになると考えたからである。

となる。芭蕉は、紀行文を書く場合、先行の紀行文にはない。新しみがなければならぬと主張している。本稿は、『おくのほそ道』に、どのような新しみがあるか考察するものである。

一

まず、全体の構成を見ると、日付を出してその日に起こった出来事を記すという日次の紀行文の形式をとっていない。この形式に従うと、その日に体験したことを、そのまま書くことになる。それは単なる事実の記録であつて文学ではない。その端的な例は、芭蕉に同行して、みちのくを旅した曾良の『旅日記』である。その日の天候、出立時刻や到着の時間、宿駅と宿駅のあいだの里程、出会った人物、出された食事などについて書かれてはいるが、曾良自信が旅中において感じたことは、ほとんど書かれていない。曾良が、どのようなものを見て、どういう思いを抱いたかは全くわからない。

芭蕉は、美しい風景を見、名利を捨てた仏道修行者や歌枕を尋ね、古人の心にふれ、強く心に刻み込まれたことを書いている。『おくのほそ道』の各章は、独立した内容を持ち、はっきりとした主題を示している。その主題は、旅中に受けた感動で、それを具体的に描いているのである。そして、それぞれの章は、前後の章と対比・照応しながらつながっており、さらには同じ気分が通い合うという構成もある。これらは、日次の紀行文の形式をとらなかったことによって生み出された新しみである。

二

具体的な例を示そう。まず、「石の巻」と「平泉」の対比について考察する。仙台藩の藩祖伊達政宗は、寛永三年（一六二六）迫川と江合川を北上川に合流させ、石巻港に流す改修工事に成功した。これによって北部の領地は新田開発が進み、収穫された米は石巻港に集められ、千石船に積み替えられて江戸に回漕されたのである。幕府も整備された石巻港を利用して幕府直轄地の米を江戸に運ぶため河村瑞賢に命じて、日本海沿岸の港を出帆して、津軽海峡を経て太平洋に出、本州沿いに南下し、房総半島を迂回して直接江戸に回漕する東廻海運を開かせた。石巻は仙台藩内最大の港に発展し、西の酒田港と肩を並べて繁栄した。宝暦頃（一七五一〜一七六三）の領内船数の調べによると、三五〇より六〇〇石積までの商船三八三艘、四一〇石〜八〇〇石までの御穀米九八艘があった。芭蕉は、

「こがね咲花」とよみて奉たる金花山、海上に見わたし、数百の廻船入江につどひ、人家地をあらそひて、竈の煙立つけたり。と描いている。

次章の「平泉」では、

三代の栄耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたに有。秀衡が跡は田野に成て、金鶏山のみ形を残す。先高館にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河也。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入。泰衡等が旧跡は、衣が関を隔て、南部口をさし堅め、夷をふせぐとみえたり。偕も義臣すぐつて此城にこもり、功名一時の叢となる。「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と笠打敷て、時のうつるまで涙を落し侍りぬ。

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房みゆる白毛かな 曾良

と述べ、清衡・其衡・秀衡と三代にわたって約百年（嘉保年中^{一〇九四}〜文治五年一一八九）の間、政庁「平泉館」を中心に立ち並んでいた屋敷・中尊寺・毛越寺など多くの寺社堂塔がその大きさを競っていた都市「平泉」が跡片もなく田や畑となっている有様に涙している。盛岡藩士清水右衛

門の絵図『増補行程記』（寛延四年^{一七五二}成）を見ても、建物としては、経堂・光堂しかなく、周囲には田野が描かれているのみである。

このように現在の繁栄を誇っている「石の巻」につづいて、空しく廃墟と化した「平泉」が描かれているので、その対比が際立ち、それだけの印象を強めているのである。「石の巻」から「平泉」へと読み進んで行くと、栄枯盛衰が常であるこの人の世、やがては「石の巻」も「平泉」と同じような運命をたどるのかもしれない、との感慨を読む者に抱かせ、人生の無常に改めて思いを深くさせるのである。

右のように考えてみると、「石の巻」の章は、一見其の繁昌ぶりが主題であるように見える。しかし、『おくのほそ道』の冒頭に、

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老をむかふる者は、日々旅にして、旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。

とあつて全編の主題である無常観が示されている。時間は永遠にとどまることのない旅人である。人の世を見ても船頭や馬子は旅で一生を終えている。人生は常住不変ではなく、変わっていくところにその本質があると芭蕉は考えたのである。「奥州第一の湊」と評された石巻もやがては衰えるときが来る。「平泉」との対比によつてこそ、「石の巻」の賑やかさの奥にある人生の真実が実感できるのである。逆に「平泉」の空しさも「石の巻」に続いていればこそ、かつての栄華が思い起こされて、現在の荒れ果てた有様のはかなさが強く胸にひびくのである。この二つの章は、一体となつて、人生流転の実相を読者に訴えるのである。

ところで、「平泉」の章はすでに取り上げた前半と、次に引用する後半の光堂の記述も対比を見せる。

兼ねて耳驚したる二堂開帳す。経堂は三将の像をのこし、光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝散うせて、珠の屏風にやぶれ、金の柱霜雪に朽て、既頽廃空虚の叢と成べきを、四面新に囲て、薨を覆て風雨を凌、暫千歳の記念とはなれり。

五月雨の降のこしてや光堂

この文で目につくのは、「二堂」「三将」「三代」「三尊」「七宝」「四面」「千歳」など数詞を多く使っていることである。それらは、「開帳」「経堂」「光堂」「安置」「霜雪」「頽廃」「空虚」「風雨」「記念」の二文字の熟語とあいまって、一つの諧調を生み出している。

句に集約されているのは、五百年もの時を経て、なお昔日の姿をとどめていることへの感動である。とつくに減んでいてよいはずのものが現前にある。よくまあ、残ったものだ、という想いが芭蕉の第一印象であつた。その気持ちをそのまま表現したのが「五月雨の降のこしてや光堂」の初案、

五月雨や年く降て五百たび

である。この句では、ただ自分の気持ちを説明したにすぎないので、すべてのものを腐らせてしまうという五月雨が五百年も降つたのに光堂が残っているのは、ここだけは降り残したに違いないという実感を、「五月雨の」の句形に改めて表現したのである。芭蕉は、光堂を目にしているうちに、

かつてこの堂に祈願を込めた清衡・基衡・秀衡、さらには義経の姿を思い浮かべたことであろう。塩釜明神に忠衡が奉納した宝塔について「五百年の俤、今日の前にうかびて、そゞろに珍し」と書いている芭蕉である。それも形あるものが残っていればこそである。五百年前のものが現存する驚きと喜びを、短文を積み重ね、二字の熟語をくり返し、「経堂は三将の像をのこし」「光堂は三代の棺を納め」「七宝散うせて」「珠の屏風にやぶれ」の対句を生かし、冒頭から畳みこむように一気に流れる文体で表現したのである。

前半、芭蕉は、平泉藤原氏の栄華がむなく廃墟と化してしまつた有様に、人間の営みのはかなさに涙している。後半は、五百年の霜雪に耐えて残つた光堂に驚きと喜びを覚えてゐる。亡び去つたものへの懐旧の涙と、現存するものへの驚嘆は、いづれも人生無常の想いから生まれたものである。

三

「室の八島」と「仏五左衛門」の場合は、人物の対比が意図されている。

前者は、歌枕「室の八島」とされている大神神社について、曾良が、

此神は木の花さくや姫の神と申て富士一躰也。無戸室に入て焼給ふちかひのみに、火々出見のみこと生れ給ひしより室の八島と申。又煙を読習し侍もこの謂也。

とその縁起を語る構成をとつてゐる。

これは、記紀の鹿葦津姫（古事記では木花之佐久夜毘売）神話によつてゐる。すなわち、日向の高千穂の峰に天降つた瓊瓊杵尊は大山祇神の娘木花開耶姫と床を共にしたが、一夜にして懐妊したため、我子であることを疑つた。そこで木花開耶姫は戸の無い産屋に火を放つて無事主産し、天孫の子であることを証明した。この時誕生したのが、火闌降命（海幸彦）・彦火火出尊（山幸彦）・火明命である。

一方、社伝では、「崇神天皇十二年、天下災害あるを以つて、天皇は豊城入彦命をして大和三輪大物主神及び相殿の神四座、新宮の神一座、新宮の相殿の神一座を当社に合祀した。」とあり、曾良の説く縁起は全く新しい見解である。曾良が『おくのほそ道』の旅立つ前に準備した「歌枕覚書」には、

煙かと室ノヤシマヲ見しホドニヤガテモ空ノカスミナルカナ

五月雨に室のヤシマヲ見渡せば煙ハ波ノ上ヨリゾタツ

の二首が引用されている。『千載集』の源俊賴と源行朝の歌である。二首ともに「煙」が詠みこまれている。「室の八島」が和歌に詠まれたのは、『詞花集』の藤原実方の

いかでかは思ひありとも知らすべき室の八島の煙ならでは

が最初である。以来、「室の八島」は「煙」とともに詠まれるのを常とした。

この「煙」の正体は水蒸気である。大神神社のある総社のあたりは、栃木県足尾山地の扇状地の末端であつたから、地下水が豊富で清水が多く湧き出してゐた。その清水から立ちのぼる水蒸気を「煙」と見たのである。下野守としてこの地に下つてゐた国守が都に帰りこの現象を伝え、都人の関心を引いて和歌に詠まれることになつたものと考えられる。曾良が木花開耶姫の神話を持ち出したのは、この「煙」を大神神社と結びつけるためであつた。

一方、「仏五左衛門」では、本人の

我名を仏五左衛門と云。万正直を旨とする故に、人かくは申侍まゝ、一夜の草の枕も打解て休み給へ。

ということばで、具体的にその人物像を描いてゐる。普通の人なら「仏」という大仰な呼び名を、臆面も無く人に説明することなども照れくさくてできるものではない。それを平気で得々と語つて聞かせるこの人物の「唯無知無分別にして、正直偏固の者」であることが知れるのである。他人がどう思うだろうなどということ全く気にかけず、思つたことをそのまま口にする。その赤子のような純真さを芭蕉は尊いことだと感じ入つたのである。

「室の八島」での大神神社の縁起を説く曾良は、神道に造詣深い人物であることがわかる。正直だけが取柄の五左衛門とは全くことなる人物である。その「室の八島」に続いて「五左衛門」が描かれることによって、両者の違いがはっきりして、それだけの人物がより具体的な印象を与えることになる。日次の紀行文ならば、三月二十九日と四月朔日と、別々の日の出来事であるから、対比した人物像を思い描くことは難しいであろう。

四

次に「尿前の関」と「尾花沢」の対比について考察する。

「尿前の関」では、まず「南部道遙にみやりて、岩手の里に泊る」とあつて、平泉から岩出山に出て一泊したことを述べてゐる。『旅日記』によれば一里半の道のりであつた。岩出山に到着する前に、歌枕「小黑崎」を見ようとしたのだが、二里あまり先だと聞いて途中から引き返したため、日暮れになつてから岩出山宿に入った。

この章では、旅の難儀を主題としてゐるので「なるこの湯より尿前の関にかゝりて、出羽の国に越んとす。此路旅人稀なる所なれば、関守にあやしめられて、漸として関をこす」と述べてゐる。尿前は、出羽との国境の要衝として重視され、仙台藩では岩出山伊達氏家中から役人を派遣し

て尿前番所の警固にあたらせていた。旅人は、仙台領に入るとき「通判」（手形）をもらい、領外に出るとき番所に差し出すことになっていた。『曾良旅日記』に「断六ヶ敷也。出手形ノ用意可有之也」と書いてある。この手形の準備がなかったのであろう。嚴重に取調べを受けたので、「漸として」と記述したのである。東海道の箱根の関所を無事越すと、一般には山祝いと称して、お互いにその困難を通り越したのを祝い合つて酒宴をした。関所は旅人にとって文字通り大きな難関であつた。

続いて、

大山をのぼつて日既暮ければ、封人の家を見かけて舍を求む。三日風雨あれて、よしなき山中に逗留す。

蚤虱馬の尿する枕もと

とある。「大山」とあるが、実際にはそれに該当する山はない。岩出山から出羽界田に至る道は、仙台藩では「出羽海道」と呼んでいた。尿前の関を出るとすぐ上りとなり、花洲山の南麓をすぎると「小深沢坂」「大深沢坂」「木ノ根坂」と難所が続ぎ、中山宿に入り、ここを出ると軽井沢へと下り、さらに陣ヶ森坂の長い下りがあつて界田に達するのである。この出羽海道を「大山」としたのは、直接には、続く「日既暮ければ」を生かすためだが、後半の大山越えにもひびき、険しい山越えが重なつて苦しい旅の連続であつたことを示すためであつた。日が没したため、本来は旅人を止めない国境の番人の家に頼みこんで一夜の宿をとつた。しかし、悪天候となり、予定外の三日の逗留となつてしまった。句も、蚤や虱にせせられ安眠できない上に、馬の尿する音も枕近く聞える旅寝のわびしさ、つらさを強調している。

後半は、最上の庄、尾花沢への山越えが描かれる。封人の家の主人が云うには、出羽の国への大山越えの道は、案内人がいなければむずかしいとのこと、そこで人を頼むと、

究竟の若者、反脇差をよこたえ、櫓の杖を携て、我くが先に立て行。けふこそ必あやうきめにもあふべき日なれと、辛き思ひをなして後について行。

この若者の嚴重な仕度が今日こそは物騒なことが起きるにちがいないと思わせる。大山という名にたがわず、鳥も全く鳴かず、繁茂した木々が重なりあつて、まるで夜道を行くようにまつ黒闇で、篠竹を踏み分けつつ、谷川を渡り岩につまづき、冷や汗を流してやつと尾花沢に出たのである。当時尾花沢村は、村山郡に属していたが、芭蕉は、漠然と尾花沢・大石田一带を最上地方と認識していたのであろう、「最上の庄に出づ」と書いている。実際の山刀伐峠越えを、「大山」として描いたのは、この章の主題が「旅の苦難」で、しかも、この後半に力点を置いていたためである。昼なお暗い大山越えの不安な心境が、

かの案内せしおのこの云やう、「此みち必不用の事有。恙なうをくりまいらせて仕合したり」と、よろこびてわかれぬ。跡に聞てさへ胸とゞ

ろくのみ也。

にひびいて、芭蕉の恐怖感が実感をもつのである。

五

「尾花沢」は、旧知の清風の手厚いもてなしが主題である。その人柄を「富るものなれども志いやしからず」と書く。金持ちであるが心の卑しさが無いというのである。また、京都へも度々出かけていて、長旅の苦勞も知っているだけあって、何日か引きとめ、心をこめてさまぐにもてなしたと述べている。終わりに四句並記したのは新しい構成である。

涼しさを我宿にしてねまる也

這出よかひやが下のひきの声

まゆはきを俤にして紅粉の花

蚕飼する人は古代のすがた哉

曾良

はじめの二句に、清風の厚遇に接した芭蕉の心情が詠まれている。と同時に「尿前の関」との対比が、具体的に表現されている。

「涼しさを」の句は、御主人の心配りのおかげで、全く自分の草庵に居る気持ちである。風のよく通る涼しい夏座敷で、何の気兼ねもなくのんびりと過ごしております、の意である。「我宿にして」ということばに、具体的な説明がなくても、芭蕉への清風の配慮がどれほど細やかなものであったかが想像できる。我家に居るようであるというのは、主人清風への最上の挨拶である。

この句の心情は、「尿前の関」の苦しい旅寝、山賊に襲われるのではないかと、びく／＼しながら越えた大山越えの不安・恐怖が強かっただけに、清風邸でのんびりとくつろいでいる安心感が、読者にも芭蕉であるかのように感じとれるのである。

「這出よ」は、「涼しさを」の気分の延長である。蚕室の床下で低い声で鳴く蠶に「這出して来い。そして私の相手をしてくれ」と呼びかけている。近くの農家では人々が忙しく蚕に桑を与えている。その蚕室の床下で蠶が鳴いている。お前はそその繁忙とは無縁だ。私もこれといった用もなく無聊をかこっている。お互い暇な同士一緒に話でもしようじゃないか、とたわむれたのである。芭蕉のすっかりくつろいだ気分がよく出ている。前句の雰囲気、そのままこの句に移っている。連句では、脇は、発句の世界の中にあつて表面に詠まれないものを見出して添える付け方を基本としている。「這出よ」は、「涼しさを」を発句とすれば、脇ということができる。二句ともに清風への挨拶である。

「まゆはき」の句は、この尾花沢に来る途中、アザミの花に似た紅花が咲いていた。紅花から紅が作られる。そんな連想が、枝の先に小花が集まっ

て咲いている姿を、眉掃の刷毛の形に似ていると感じさせたのである。紅を差し、眉掃を使う美人の顔が余情として浮かんでくるのも自然である。尾花沢では紅花を栽培していなかった。『曾良旅日記』に「立石の道にて」と前書きがある。紅花はこの地方の特産品で、当時、紅の原料である出羽の紅花は、全国の六割から七割を占めていたという。清風はその紅花問屋を営んでいた。この句は土地柄をほめて挨拶としたのである。

「蚕飼する」の句は、養蚕をする人々の清浄を旨とした素朴な服装に古代の人を感じ取った吟である。芭蕉の「這出よ」と並べてもよいのだが、すでに述べたように、「這出よ」は「涼しさを」と発句と脇の関係で配しているため、四句目に出したのである。

さて、「尾花沢」の構成は、前半で清風の人柄を、金持ちでありながら品性が卑しくないこと、長旅の経験があるので旅人の心情をよく理解している、と述べている。後半は四句を並記し、はじめの二句で、彼のもてなしによって、芭蕉がどれほど心地よく旅の疲れを癒し、くつろいでいるかを具体的に表現した。

六

この人物を、主題に据えるというのは、先行の紀行文にはない新しみである。すでに取り上げた、「仏五左衛門」のほか、「日光」の曾良、さらには「須賀川」の等躬、「宮城野」の画工加右衛門、「塩釜」の和泉三郎、「等裁」、「小松」の実盛がその例である。

「須賀川」の等躬の場合。

すか川の駅に等躬といふものを尋て、四、五日とゞめらる。先「白河の関いかにこえつるや」と問。「長途のくるしみ、身心つかれ、且は風景に魂うばゝれ、懐旧に腸を断て、はかゞしう思ひめぐらさず。

風流の初やおくの田植うた

無下にこえんもさすがに」と語れば、脇・第三とつゞけて三巻となしぬ。

とある。等躬は、芭蕉の顔を見るや、何はさておいて真つ先に「白河の関で、どういう句をお詠みになりましたか」と尋ねた。風流に志の篤い人物であることを、本人のことで端的に示したのである。芭蕉が、しっかりと句作りを思案することもできなかったが、一句も詠まないのも残念であるといつて、「風流の初やおくの田植うた」を披露すると、この句を発句に歌仙一卷を成就し、さらに歌仙二巻、合わせて三巻興行したという。この俳諧興行も等躬の並々ならぬ熱意の表れである。

このように、その人物のことはよつて、人柄を具体的に表すという方法は、「宮城野」の画工加右衛門の場合も同様である。

名取川を渡りて仙台に入。あやめふく日也。旅宿をもとめて、四、五日逗留す。爰に画工加右衛門と云ものあり。聊心ある者と聞て、知る

人になる。この者、年比さだかならぬ名どころを考置待ればとて、一日案内す。

芭蕉は、仙台で画工加右衛門が風流を解する者であると聞いて知人となった。加右衛門は数年の間、場所のはつきりしない歌枕について考えて置きましたので、といつて仙台的有名な歌枕を一日中案内し、さらに松島・塩釜の地図を書いてくれた。次の「壺の碑」に「かの画図にまかせてたどり行ば」とあり、「塩釜」「松島」への展開も無理がなく、この加右衛門の登場は効果的である。餞別には「紺の染緒つけたる草鞋二足」を贈ってくれた。芭蕉は、自分の足にあった草鞋を手に入れたというのが、私のささやかな願いであると『笈の小文』に述べている。加右衛門の餞別の草鞋はどこにでも売っている出来合いのものではなく、芭蕉の足に合うように注文して作らせたものに違いない。しかも、蝮や、毒虫が嫌う紺色の麻の緒をつけてあるという念の入れようである。その細かな心づかいを「爰に至りて其実を顕す」と賞賛している。

七

「塩釜」では、藤原秀衡の三男忠衡（つまり和泉三郎）を主題としている。はじめに塩釜神社の壮麗な社殿についての描写がある。仙台藩の藩祖伊達政宗は、京都・奈良に劣らない寺社建築の造営に意欲をもち、国宝に指定された大崎八幡神社について建立したのが塩釜神社であった。芭蕉は、神前の古い宝塔に「文治三年和泉三郎寄進」とあるのを見て、その感動を

五百年來の俤、今日の前にうかびて、そゞろに珍し。渠は勇義忠孝の士也。佳命^{きめい}今に至りて、したはずといふ事なし。誠「人能道を勤、義を守べし。名もまた是にしたがふ」と云り。

と綴っている。

「文治三年七月十日、和泉三郎忠衛敬白」と刻した鉄燈籠の文字を見ると、眼前に二〇歳のりりしい若武者の姿が浮かんできたのである。芭蕉はその場に立ち合っていると感じたため、ただもう無性に嬉しいと書いたのである。

忠衛は、文治五年（一一八九）、源頼朝の命に従った兄藤原泰衡から義経を討つことに同意を求められた。しかし、彼は父秀衡の義経を大将として兄弟力を合わせて頼朝に立ち向えとの遺言を守り、その申し出を断った。泰衡に襲われた義経は合戦したが敗れ、自害した。同年閏四月三十日であった。その年の六月六日、忠衛は同意しなかったことを理由に泰衡に攻められ殺されてしまった。二三歳であった。

芭蕉は、忠衛が人間としての道を守ったからこそ、死後もその名声がたたえられるのだと結んでいる。若い武士の悲劇的な生涯への哀悼の気持ちは、二五歳で亡くなった主君藤堂良忠へとつながっていくのである。この一節は、「黒羽」の与一、「佐藤庄司が旧跡」の二人の嫁がしるし・義経の太刀・弁慶が笈、「末の松山」の奥浄瑠璃とともに「平泉」への伏線となっている。

八

福井の隠士等裁の場合は、今までの人物の描き方を変えている。まず、一〇余年以前、等裁が江戸に出てきた折に知り合つたと二人の間柄を説明し、

いかに老さらばひて有にや、将死にけるにやと人に尋侍れば、いまだ存命して、そこくと教ゆ。

と無事で居るかどうか、不安であつたと書いてある。これは、「金沢」で、是非会いたいと思つていた一笑が着いてみたら、すでに去年の冬なくなつていたという生々しい体験があつたため、芭蕉がほつと安心した気持ちと言外に感じられる。その住居は、

市中ひそかに引入て、あやしの小家に、夕貌・へちまのはえかゝりて、鶏頭・はゝ木に戸ぼそをかくす。さては、此うちにこそと門を叩ば、侘しげなる女の出で、「いづくよりわたり給ふ道心の御坊にや。あるじは此あたり何がしと云ものゝ方に行ぬ。もし用あらば尋給へ」といふ。かれが妻なるべしとしらる。

賑やかな町中から離れたところに、みすばらしい小さな家があり、夕顔やへちまがはえかかり、鶏頭や帚木が門口を隠している。芭蕉は、この世俗との交わりを断つたような様子から、等裁の隠れ家にちがいないと思う。戸を叩くと、出てきた女性が「どこのお坊さんか存じませんが、主人はどこそこへ出かけています。用があればそちらへお廻りください」との素っ気のない答えに、世間離れた等裁の妻だと知るのである。この住居と妻の応答に等裁の暮らし振りが浮かび上がってくる。そして、「その家に二夜とまりて」には二人の親交の深さがあらわされ、終わりに、

名月はつるがのみなとにとたび立。等裁も共に送らんと、裾おかしうからけて、路の枝折とうかれ立。

名月は敦賀で一緒にと、等裁はこれといった旅仕度もせず、道案内は私だと先に立つて行く。飄々とした等裁の人柄が簡潔に描かれている。無駄のないみごとな構成である。

九

「小松」では、軍記物語の人物を取り上げている。

小松の多太神社には、斎藤別当実盛の遺品がのこつていた。

此所、太田の神社に詣。実盛が甲・錦の切あり。往昔、源氏に属せし時、義朝公より給はらせ給とかや。げにも平土のものにあらず。目庇より吹返しまで、菊から草のほりもの金をちりばめ、竜頭に鍬形打たり。実盛討死の後、木曾義仲願状にそへて、此社にこめられ侍よし、植口の次郎が使せし事共、まのあたり縁起にみえたり。

むざんやな甲の下のきりぐす

この章は、実盛の甲を中心に構成している。源義朝から下された兜というのは、史実にはなく、木曾義仲が神社に奉納した「木曾義仲副書」に記事がある。芭蕉はおそらくそれによったと思われる。

木曾義仲と実盛には因縁があった。源義朝の長男源義平が武蔵の戦いで、義仲の父義賢を討ったとき、実盛は義平から、二歳の義仲を殺すように命じられたが、義仲の乳母の夫信濃国木曾の仲原兼遠のもとに逃がしてやった。実盛は、義朝のもとで保元・平治の乱を戦ったのち、義朝の死後は平家に属した。治承四年（一一八〇）、義仲は以仁王の令旨を受けて平家討伐の兵をおこし、北陸道を西に進んで寿永二年（一一八三）加賀に入った。一方実盛は、木曾義仲追討の平家軍に加わり、出陣に当たって大將宗盛の許しを得て、大將が着る赤地錦の鎧直垂を身につけ、老武者としてあなどられてはならぬと、白髪を黒く染めた。六月、加賀国篠原の戦に平家軍が敗走する中、一人とどまり手塚太郎光盛に討たれた。芭蕉は、これらのことは、『平家物語』『源平盛衰記』謡曲「実盛」などによって周知のこととして一切省略している。

実盛は、かつて命を救った義仲を敵として戦う立場になるとは、夢にも思わなかったであろう。この二人の結びつきを、芭蕉は天命と見ていた。『野ざらし紀行』の旅の折、富士川のほとりの捨子を見て、お前は父に憎まれたわけでもないし、母にきらわれたわけでもない。「唯これ天にして、汝が性のつたなきおなけ」と書いている芭蕉である。実盛と義仲が、お互いを敵として相戦うことになったのは、まさに天命であったと観じていたはずである。その想いは結びの一句に集約されている。

句意は、ああなんと痛ましいことか。実盛の兜を見ていると、自分が命を助けた義仲を討とうとして、白髪を染めて出陣したその覚悟が偲ばれてならない。その兜の下ではコオロギもむせび鳴いているかのようだ、の意。

「むざんやな」は、直接には、実盛の悲運に同情した芭蕉の心情の表れである。しかし、願状副書に、わずか七日間であるが父子の約束をしたと書いた義仲に対する想いもこめられていると見るべきである。

この章では、実盛の兜をとり上げながら、人と人との不思議な結びつきに、人智を越えた天命を感じている芭蕉の心に趣深いものがある。

一〇

「敦賀」では、遊行上人の砂持の神事が主題となっている。前半は、福井から八月一四日の夕暮、敦賀の港に至るまでの記述で、白根が獄・比耶が嵩や木曾義仲の旧跡燧が城を並べて一文としている。

一四日の夜、月が美しく晴れているので、宿の主人に明日の夜の天候を聞くと、北陸のことで予想はできないと答える。そこで夜、氣比神社に

参詣する。神前の白砂は霜が一面におりているのかと見えるほどであった。

往昔、遊行二世の上人、大願発起の事ありて、みづから草を刈、土石を荷ひ、泥滓をか^⑤はかせて、参詣往来の煩なし。古例今にたえず、神前に真砂を荷ひ給ふ。「これを遊行の砂持と申侍る」と、亭主のかたりける。

月清し遊行のもてる砂の上

時宗では、開祖の一遍上人を二世とし、その高弟他阿上人を二世としている。他阿上人は、正安三年（一三〇一）、当社を訪れ、社の辺りが沼地であったため、時宗の僧尼とともに浜の砂を運び整地したという。芭蕉はそのような高僧が、氣比神社に参詣する庶民の不便をなくそうと思ひやつて奉仕なさったこと、しかも、代々の上人に受けつがれて、北国に遊行された折には、必ずここに来て砂持の行事を行っているということに強い感銘を覚えたのである。

句は、氣比神社に参詣すると、神前には遊行上人がお運びになった白い真砂が敷きつめられている。その砂を一日四日の皎々とした月光が照らしており、ただく神々しくきよらかである、の意。澄みきつた月光と真白な砂の輝きは、高德な上人の象徴である。

この句と、「日光」の「あらたふと青葉若葉の日の光」には対比がある。日光の歴史上の人物徳川家康を讃仰する句に対し、現在も行われている遊行上人の砂持を何と有難く尊いことだと詠んでいる。社前に敷きつめられた白砂を目にして芭蕉の思いには切実なものがあつたことだろう。

一一

さて、人物を主題とした章以外にも様々な人が登場している。芭蕉は、一切の執着を捨てた仏道修行者の旧跡を尋ねることを、旅の楽しみみの一つにあげていた。

そこで、まず「雲巖寺」をとり上げよう。この寺は黒羽より三里のところにある。

仏頂は、延宝二年（一六七四）、鹿島根本寺の住職となつた。鹿島神宮の大宮司は、先の住職が亡くなつたときに根本寺の寺領白石のうち五十石を横領した。仏頂はその領地を取りもどすため、深川の宿所臨川庵に入つて寺社奉行に訴訟を起こした。この臨川庵は、芭蕉庵の東南五、六分のところにある。仏頂は天和二年（一六八二）、九年目によりやく勝訴を得た。その後、彼はしばしば雲巖寺に入り、正徳五年（一七一五）、ここに入寂した。

鹿島神宮は、常陸の国の一宮で、祭神は武甕槌神^{たけみかづちのかみ}。崇神天皇のとき、太刀・鉾・鉄弓・鞍などの武具が奉納されたと伝えられ、この神が武神として信仰されることになった。平安時代は、藤原氏の氏神とされ、中世に入つても源頼朝の当社への信仰は篤かつた。近世では慶長七年（一六〇二）、

徳川家康が二千石の朱印地を寄進し、元和五年（一六一九）、秀忠の代に大がかりな造営が行われた。現社殿はその時のものである。この幕府の手厚い保護を受けている鹿島神宮の大宮司を相手にして、その横領を訴えた仏頂は並みの人物ではない。俳諧一筋に精進する芭蕉にとって、不正に立ち向かつて信念を貫き通した仏頂には、大いに共感するところがあつたにちがいない。

その仏頂の山居の跡が、雲巖寺の裏山にあると芭蕉は聞いていたので尋ねた。

当国雲岸寺のおくに、仏頂和尚山居跡あり。

堅横の五尺にたらぬ草の庵

むすぶもくやし雨なかりせば

と、松の炭して岩に書付侍りと、いつぞや聞え給ふ。其跡みんと雲岸寺に杖を曳ば、人々すすんで共にいざなひ、若き人おほく道のほど打さはぎて、おぼえず彼麓に到る。

縦横五尺にも満たないこの草庵も、雨を避けるためのもので、一所不住の雲水の身には無用のものである、という歌に仏頂の悟道のため精進し続ける覚悟が、はつきりと出ている。寺内で生活せず、山中に庵を構えたこともその表れである。西行の「とふ人も思ひ絶えたる山里のさびしさなくば住み憂からまし」の西行の心境に通ずるものがある。

芭蕉も「風雅の誠」を責めて、現在の境地に満足せず、「四時の押し移る」ように前進し続けた。自らの道を俳諧一筋と定め、「天下の俳諧」をまつしぐらに進むためには、一所不住、現在に安住してはならない。たゆまぬ修行あるのみであつた。仏頂の覚悟は芭蕉の心そのものでもある。

また、黒羽の人がすすんで案内に立つたことは、前章の翠桃の心をこめたもてなしに照応するもので、親しみのある交友ぶりに心和む感じがする。

芭蕉は、仏頂の山居がそのまま残っていることに強い感動をおぼえ、

木啄も庵はやぶらず夏木立

と即興の句を詠んだ。寺つつきと異名のある啄木鳥も仏頂和尚の住んでいた庵をおそれたか、どこといつて損なわれることもなく、しんと静まり返った夏木立の中にあることよ、の意である。貞享四年（一六八七）、根本寺へ月見に出かけて以来、芭蕉は仏頂と会っていない。その山居を目のあたりにして、仏頂和尚の姿を彷彿とさせていたことであらう。

芭蕉は、「須賀川」で、俳諧熱心な等躬を章の主題にすえた。そして、つづいて宿の片隅で大きな栗の木陰に庵を結ぶ僧について、

椽ひろふ太山もかくやと間に覺られて、ものに書付侍る。

と書いている。「椽ひろふ太山」とは、『山家集』の

山深み岩にしだるる水溜めんかつがつ落つる橡拾ふほど

を念頭においたことばである。橡の実を拾って食べ物とするような高野山での西行の日々も、こうだったのだろうと、世俗を逃れた静かな暮らしぶりに感じ入った芭蕉は、

栗といふ文字は西の木と書て、西方浄土に便ありと、行基菩薩の一生杖にも柱にも此木を用給ふとかや。

世の人の見付ぬ花や軒の栗

今、軒端の栗は白く長い総状の花をつけている。世間の人は、そのよきを見出すことはない。俗縁を絶ち仏の道に励む庵の主は、西方浄土にゆかりがあるとして、一生この木を用いられた行基菩薩と同じ心持なのであろう、との句意。

脱俗の人については、「松島」の雄島にも記述がある。

雄島が磯は地つゞきて海に出たる島也。雲居禪師の別室の跡、坐禅石など有。将、松の木陰に世をいとふ人も稀く見え侍りて、落穂・松笠など打けふりたる草の菴閑に住なし、いかなる人とはしられずながら、先なつかしく立寄ほどに、月海にうつりて、昼のながめ又あらたむ。

この雄島の一節は、みちのくの旅の大きな目的であった「松島の月」を、どのように昇らせるかという点で大きな役割を果たしている。つまり、昼から夜への時間の経過を具体的に描いていることである。松の木陰の草庵に心ひかれて、芭蕉がまっ先に立ち寄っているうちに、月の影が海に映ったという描写がそれである。雄島は、無依の道者の修行の場であった。「一たびは仏離祖室の扉に入らむ」とした芭蕉が、この島から離れがたかったのも当然である。世捨人への強い関心が時間の流れを芭蕉に忘れさせたのである。

さらに、次の「瑞巖寺」の章は「彼見仏聖の寺はいづくにやとしたはる」で終わっている。見仏上人は、鳥羽天皇の頃の高僧。雄島に茅ぶきの庵を結び、精勤苦練一二年、その間法華経を六万部を誦したと伝えられる。『撰集抄』には、西行が能登の岩屋で断食している見仏上人と出会い、後に上人をしたって松島の寺を尋ね、二か月ばかり住んだと伝えている。この話はよく知られていたもので、芭蕉も「彼」としたもので、見仏聖の寺は、西行につながるため、どこにあるのだろうか、是非尋ねたいものだという気持ちを書いたのである。

一一一

さて、芭蕉がこの旅中対面したいと強く望みながら果たせなかった人物があった。金沢の一笑である。

彼は二〇歳のとき、『時勢粧』に三句入集して以来、貞門・談林の俳書に名が見え、貞亨四年（一六八七）刊の蕉門尚白撰の『孤松』には

一四九句が収録された。等躬・清風とは違って、いわば現役の俳人であった。『曾良旅日記』によれば、金沢に到着するとすぐに一笑に連絡を取ったところ、すでに去年の十一月六日に死去していたことを知ったのであった。芭蕉の衝撃の強さは、兄が主催した追善の句会での追悼吟にはつきりと出ている。

塚も動け我泣声は秋の風

句は、一笑の塚よ、私の心感じて動いてほしい。あなたの死を悼む私の慟哭は、折から肅々と吹き渡る秋風そのものである、の意。動くはずのない墓石に動いてくれよ、と強く訴えかける芭蕉。金沢に着くまでその死を知らず、対面を心から楽しみにしていたのである。突然、その死を知った芭蕉の悲しみの強さがこの表現となった。心からの叫びであつたに違いない。

ただ、芭蕉はこの章で一笑の死を主題とはしていない。はじめに大阪から来た商人何処と同じ旅籠に泊まったことを書いている。つまり、この人は俳諧の心得のある人物なのである。全く一面識もなかった人と知り合いになる一方、会うことを念願していた人は、すでにこの世の人ではなかった。これが常ならぬ人の世の実相なのだ、と芭蕉は身をもつて感じたのである。だから、「塚も動け」につづけて、

ある草庵にいざなはれて

秋涼し手毎にむけや瓜茄子

途中吟

あか／＼と日は難面もあきの風

の二句を配している。「秋涼し」は、もてなしとして出された瓜や茄子を、めいめい皮をむいてご馳走になろう、と興じている。人生には喜びもあれば、悲しみもあることを芭蕉は具体的に表したのである。「あか／＼と」の途中吟をここに置いたのは、打ち興じている折、ふと辛かったことを思い出すのはよくあることで、そういう体験をここに生かしたのである。あか／＼とした夕日を浴び、情容赦ない残暑のきびしさに足取りは重い。とき折吹きすぎる風に秋の気配を感じ、ほつとしている気分がよく出ている。

一二

金沢では、常ならぬ人の世の実相という主題を明確にするために一笑を取り上げたのであった。

同じ例として、芭蕉が新潟の遊女と泊り合せた「一振」を考察しよう。遊女が旅に出ているのは、「拔参り」という近世に流行した風習であった。これは、主人や親の許しを得ずに伊勢詣をすることである。芭蕉は、親しらず・子しらずなどの北国一の難所を越え、疲れきってなかなか寝つか

れず、聞くともなく隣室の遊女の話をする。遊女は、

白浪のよする汀に身をはふらかし、あまのこの世をあさましう下りて、定めなき契、日々の業因、いかにもつたなしと、（後略）

と言う。遊女の身に落ちぶれて、今、毎日く／＼していることが、来世の果報につながると思うと、なんと不運なことかと嘆いているのである。そして、翌朝、芭蕉は遊女に僧侶としての御情によつて同行させて欲しいと、涙ながらに頼まれる。我々はこれから立ち寄るところも多い。同じ街道を行く人に従いなさい。大神宮の御加護もあるだろうと、言い捨てて出立してしまつたが、かわいそうなことよ、と同情する気持ちがしばらくはやまなかつた。芭蕉は、せめて来世は幸福にと願ひ、伊勢参りをする遊女のことを思う。彼女自身、今自分のしていることが、来世のよい果報につながるかは考えていないのである。それでも参宮したいとの切ない思いから旅に出た。その心情に深いあわれみを感じるのである。

そして、世捨人同然の自分と、全く境遇の違う遊女が一つの世界に生きているのが、この世の中なのだ、という実感が、一家に遊女もねたり萩と月

の一句となつた。会うは別れ、これが人の世である。その感慨を強く抱いたのである。

『猿蓑』の「市中はの巻」で「僧やゝさむく寺にかへるか 凡兆」の前句に、「さる引の猿と世を経る秋の月」と芭蕉は付けている。土芳は、身分・職業の異なる人々が寄り集まつているのが、この世の実相であると、前句に寄せて示したものと解説している。

芭蕉は、遊女との同行を断つたことで、俳諧一筋の自分の道を明らかにした。俳諧は夏炉冬扇に等しく、世俗の人々の求める名利とは無関係で無用のものである。俊成や西行の和歌は真実がこもつていて、しかもしみ／＼とした情趣がある。芭蕉が俳諧に精進するのは、その境地を追求するため、それには一瞬の気の緩みも許されない。旅は芭蕉にとって高い詩精神を持続させる修行の場であつた。

一四

さて、『おくのほそ道』では、その場面にふさわしい人物の登場が効果を上げている。

まず、「那須」を見よう。黒羽の知人を探ねようと、那須野ヶ原を越えるため、近道をするが、雨が降り出して日が暮れてしまう。農家に泊り、翌日また野中を進んで行き農夫と出会う。

この章は、那須野ヶ原の本情、広大さが主題である。まず、近道をして一日では越えることができない広さを描いている。そして、草を刈つている男に道を尋ねると、

「いかゞすべきや。されども此野は縦横にわかれて、うる／＼敷旅人の道ふたがえん、あやしう侍れば、此馬のとゞまる所にて馬を返し給へ」

とかし侍ぬ。

この那須野ヶ原は、道が幾筋にもわかれていて、初めての旅人は迷ってしまうのが心配である。この馬は道を知っていて人里に出ればとまるから、そこから馬を返して下さい、と農夫は馬を貸してくれる。馬のとどまる所とは、黒羽のことをさしているのである。芭蕉は思い切った省略をして引き締まった文章にした。「縦横にわかれて」は、古歌の表現によっている。自分が道案内できないため、代わりに馬を貸すというのが以外であり、かつ、いかにもありそうなことと納得させられる。放牧されている馬や牛が夕方になると、牧舎に自然に帰って行くことはよく知られている。

つぎに、二人の子供が馬の後を追いかける姿を書いている。これは人里までの途中経過として無理がなく、生い茂った夏草に隠れてしまいそうな「ちいさき者ふたり」は、那須野ヶ原の広漠たる野の点景として申し分がない。農夫と子供二人は、この章において欠くことのできない登場人物である。「文字摺石」には、「さと人のいひ伝へ侍るは」としているものがある。しかし、この表現ではありきたりで面白味がない。よそから来た旅人に、物事の由来をこまつしやくれた子供が、尤もらしく話して聞かせるというのは、よくあることだ。芭蕉と曾良が、童のことばになるほどとうなづいている姿が想像できて、生々とした場面になったのである。

「壺碑」を見て、千年の記念に感動した芭蕉は、「末の松山」では、語り継がれている奥浄瑠璃に心を引かれる。歌枕をめぐつて末の松山のある寺にたどり着く。あたりの墓地を見ていると、どんなに変わらぬ愛情を誓い合っても、ついには墓の下に埋もれるのが人の世の常だ、と感じて切なさが身にしみるのである。塩釜の浦にもどると入相の鐘が聞え、少し晴間の見えた空から夕月がもれて籬ヶ島が目近に見える。漁船がつぎ／＼港に入ってくると。大勢の漁師たちが大声で魚をより分ける。古人はこういう状況をわびしいと感じたのか、と共感を覚える。

その夜の宿。隣室から、盲目の法師が琵琶をかき鳴らして、奥浄瑠璃を声を高く張り上げて語っている。鄙びた調子でやかましいのだが、片田舎に根付いた語り物がいまだに続いていることに感心するのである。奥浄瑠璃は、『奥細道菅菰抄』に「今俗の仙台浄瑠璃といふものにて、多くは義経奥州下りの事などを作りて語る也」と解説している。曲目に「烏帽子折り」「尼公物語」「牛若東下り」「八嶋物語」など判官物と呼ばれるものがある。場所柄これらが語られていたと思われる。次の「塩釜」の和泉三郎の記事とともに、奥浄瑠璃は「平泉」の伏線となっている。

『おくのほそ道』には、宿の主人・農夫・武士・僧侶・歌人・俳人・盲目の法師・関守・道案内・修験者・遊女・隠士など実に様々な人物が登場している。年齢や身分・境遇が違う人々が紀行文の流れに変化を与え、それ／＼の章の主題にかかわって情趣をかもし出す要因になっている。この人物の扱いが『おくのほそ道』の新しみである。